市川学園第三教育センター通信

実況中継「土曜講座」

第 7 号　２０２５年　9月　１３日発行

市川学園９月６日の土曜講座　於 國枝ホール

鎌田　薫先生

記録を守る、未来に活かす

―公文書管理の意義と課題―

国立公文書館館長

鎌田先生のご紹介

昭和45年 早稲田大学法学部卒業
昭和58年 早稲田大学法学部教授（～平成30年3月）
平成22年 早稲田大学総長（～平成30年11月）
令和3年　独立行政法人国立公文書館長（～現在）

主な講義内容の紹介

第４回土曜講座は、鎌田先生による、公文書についてのお話でした。本校は社会科の取り組みとして公文書館ツアーを実施している学年もあるため、行ったことがある人もいるかもしれません。しかし、「聞いたことはあるけれど、実際にどんなものか見たことがない」人が多いであろう公文書について、わかりやすくお話していただきました。国や地方公共団体の公務員が職務上作成・保管する文書を公文書といいますが、その適切な管理をするために期待されているのが「アーカイブズ（文書を体系的に整理・保存する施設、またその機関）」です。アーカイブズが整備されれば、行政庁にとっては適正さ、業務の効率化、公平性を担保することができます。また、業務運営の妥当性を説明・立証することができます。第三者が妥当性を確認することもできます。我々国民の立場から考えると、業務運営の正当性を評価することができ、団体や個人の行動様式や思想的背景の特性（アイデンティ）を見出すことができます。我々が必要な文書を容易に閲覧できるようにするためには、効果的な検索システムを構築するとともに、適切な助言を提供できる「アーキビスト」がいることが望まれます。アーキビストとは、「公文書の適切な管理を支え、かつ永続的な保存と利用を確かなものとする専門職のことです。日本ではまだなじみの薄い「アーキビスト」というのですが、近年養成プログラムを持つ大学も増えてきており、国家資格にしていくべきという動きが活発になってきています。近現代の日本の歴史を、事実としてとらえるだけでなく、「なぜこのようなことが起きたのか」「背景には何があったのか」という探究が重要だと鎌田先生はおっしゃっていました。その鍵を握る公文書を管理する「アーキビスト」が活躍する世の中になってほしいと感じる今回の先生のご講演でした。

受講レポートから

・公文書は私たちにとってあまり関係がない資料だと思っていたが、自分のルーツや権利などを知れるもの、行政庁等の業務運営者にとっては必要不可欠であるものだということがわかり、公文書の大切さを理解することができた。また、アーキビストといわれる司書や学芸員の方などは私の身の回りにたくさんいらっしゃっていたので、意外と身近な職業だった。国立公文書館は内閣府と連動していて、専門知識について相談を受けたり、廃棄についての許可を求めたりするなど、関わりが深いことが分かった。国立公文書館が保存する特定歴史公文書は約 175 万冊あり、その中には 31 点の重要文化財が含まれるということがわかり、それだけの文書が保管されるくらいの機関であるということが分かった。また、デジタル資料の利用を今後してみたいと思った。（中１女子）

・財務省の管理がきちんとしていたからこそ森友学園に関する公文書の廃棄が発覚したという視点に驚いた。たしかに管理が行われていなければ明らかにならないなと思った。公文書が保存期間を終了したときに公文書館がそれを保存する最後の砦になる。公文書館の認知度が上がればもっといろいろな人が昔の公文書を読むことができると思う。明治政府が収集した古書などを見られるのはすごくおもしろそうだなと思った。デジタルアーカイブで見られるのは楽だしすぐ見られるので良いなと思った。（中３女子）

・今回は貴重でとても面白くためになる話をありがとうございました。私は歴史が好きで、よくその場所に行き博物館に行ったりするのですが、公文書になっているとは思わず、驚きました。これからは検索機能を使ってみてみようと思いました。また、公文書改ざんで問題を解決するのに約１０年かかっているのには驚きました。日本はほかの国と比べて遅れているから、もっと人数を増やしたり確認の一部をＡＩにまかせたりすると早くなるのではないかなと思いました。国会議事堂付近は私用でよく行くことが多いので、開館したら寄ってみたいと思いました。（中２女子）

・実際私は、この講座を受けるまで、あまり国立公文書館について知らなかった。この講座を受けて、昔の記録を守ることが、現在、もしくは未来に起こりうる事態に対応するためには、ほかに代えられないほどに大切であるということを再確認した。そのために、アーアイブスをデジタル化するなどの保管方法を使っているところに、世の中の進化が私たちをしっかりと手助けしているということを感じた。アーキビストがあまり世の中に知られていない現状がある中、公文書管理のためにも、どのように認知度を上げていくかということが今問われていると思った。（高１男子）

・公文書として記録を見てもらうためには、起こった事実を偽りがないように記録することが大切だと感じた。公的に保管することによって国民の信用も得やすいうえに、教育への利用もしやすいと感じた。常設の展示に加えて臨時の企画もあって、国民の来館のための工夫が見えた。自国の詳細な情報を得ることによる国民意識の上昇は愛国心にもつながると思う。公文書館があることによって人々が事実から考える力を養うことにもつながり、より多くの事実を知るきっかけにはなるが、現状は国民の認知が足りておらず、より身近で有益なものであるべきでなければならない。そのためには読む人が文書の中の情報の取捨選択も重要だと感じた。日本で最も正確な情報がある場所なので、重要な時には活用したい。（高２男子）

（文責：野地　亜由美 先生）